

Booth の思想遍歴

——そのキリスト教徒としての開眼——

南 井 正 廣

I

Fielding の *Amelia* は *Joseph Andrews* や *Tom Jones* と違って、1組の夫婦を主人公とする小説である。しかし、小説のタイトルやエピグラフ¹からも明らかなように、夫である Booth より妻である Amelia の方に重点が置かれていることは否めない。出版以来多くの批評家達が *Amelia* に言及してきているが、彼らも殆んどの場合夫たる Booth を簡単に片付けてしまっている。*Amelia* とは、主人公 Amelia の純心無垢や有徳ぶりが数多くの不幸な出来事の中で試され、実証されている作品であって、すべての出来事が Amelia との関連で述べられ、夫の Booth ですら Amelia を引き立てるための脇役にすぎないと、彼らは主張するのである。² この小説の中心人物が Amelia であることは、疑いの余地がない。しかしながら、Aurélien Digeon の指摘しているように、「*Amelia* では興味の中心が必ずしも常に行動の中心ではない」³ のである。つまり、主人公たる Amelia は静止した人物であって、行動するのは夫たる Booth なのである。⁴ Fielding はこの小説に於いて、Amelia の善良さを強調しようとしているが、Booth の行動を論ぜずしてそれを語ることなどできないのである。それ故、この作品を十分に理解するためには、Booth の行動を把握することが、是非とも必要となる。この論文では、Booth の行動に焦点を当て、彼が小説の中で如何なる体験をし、どのような教訓を得たのかを論じ、Booth が単なる Amelia の引き立て役ではなく、固有の価値を持った人物であるということを実証してゆきたい。

II

Amelia の男性主人公たる Booth を論じる際に、先ず批評家の頭をかすめるのは、Fielding の前 2 作で登場した主人公達である。やさしさや気前のよさという点では、Booth は Joseph や Tom とたいして変わりがない。馬車の転覆で鼻に怪我をした Amelia が、若い女性達にからかわれているときに、Amelia に同情し守ってやったこと（この事件が 2 人の結婚へのきっかけとなる）からも彼のやさしさは察しがつく。また彼の戦友である Bob Bound が食事代を貸してくれと頼んだとき、彼自身 50ポンドの借金があるにもかかわらず、Bob が頼んだ 2 倍の額のお金を貸し与えているというエピソードからは、Booth が本当に気前のよい人物だということが十分伺い知れる。妊娠中の妻を思いやる Booth、姉の死を痛く悲しむ Booth、留置場で仲間の囚人に同情を寄せる Booth、子供と遊んでやる陽気な父親である Booth — Booth のやさしい行為や言動は枚挙にいとまがない。

しかし、Fielding が Joseph や Tom を完璧な人物として描かなかったのと同様、Booth にも欠点がある。その最たるものは、彼の性格上の脆さである。Booth の家族に一連の不幸をもたらした原因は、他ならぬ彼の性格上の弱さである。*Amelia* 全体を通して、彼の脆弱な性格が引き起こした罪は、以下の 4 つである。

第 1 番目は、Dr. Harrison の勧めで農夫になった時、俗物根性にとりつかれ、奢侈に耽った点である。事業の拡大をもくろんで失敗したり、柄にもなく馬車を買ったりして、大きな借金をつくってしまったのである（Booth 一家がロンドンへ逃げて来なければならなかったのは、この借金のせいである）。2 番目の罪は、留置場の中で、かつての知り合いである Miss Matthews の誘惑に屈して、彼女と関係を持ってしまったことである。Booth の立場が如何に弁護されようと、彼が誘惑に負けたことは事実であるし、さらに悪いことに、彼には自分の罪を妻に告白する勇氣もない。第 3 の罪は、

Mr. Trent の奸計にはまり、ギャンブルで50ポンドもの借金をつくってしまったことである。そして第4番目は、妻が自分の小物や子供達の服などを質入れまでして、かき集めてくれた返済金を、愚かにも別の相手——借金の債権者ではなく、Booth のためにすぐに任官を得てやると約束してくれた陸軍省のお偉方に渡してしまったことである。

これらの4つの罪は、いずれも Booth の精神的な脆さに起因している。もし彼に道徳心に基づく勇気が備っていたら、これらすべての罪を犯さずに済んだであろうから。

このように、Booth はやさしく気前のよい人物である反面、悪に感染しやすい人物でもある。Booth の性格の中に混在する美德と悪徳とは互いに矛盾するものなのだろうか。確かに人間の性格には矛盾は付きものかも知れない。しかし、だからと言って、単に Booth の性格にも良い所と悪い所があると簡単に処理してしまうだけでは、Booth はやはり Amelia という主人公を活かすために御都合で作られた人物になり下がってしまう。従って、Booth を悪へ導いた主要因たる彼の精神的な弱さが何に起因するのかを究明して、Booth という人間の本质に迫ることが必要となる。

III

Amelia を読み進むうちに、Booth の精神的虚弱症には思想的背景が存在することが判明してくる。Booth には独自の情念論 (theory of passions) があるのである。Booth の考えによれば、“...every man acted merely from the force of the impulse of passion which was uppermost in his mind”⁵ なのだから “his actions could have neither merit nor demerit.” (III, 211) なのである。従って、その時その時の優勢な情念によって行動する人間にとっては、宗教や道徳など何の役にも立たないと、彼は結論づけている。Booth は、自分の理論の正しさを実証している人間として Colonel James を賞賛している。

“The behaviour of this man alone is a sufficient proof of the truth of my doctrine, that all men act entirely from their passions; for Bob James can never be supposed to act from any motives of virtue or religion, since he constantly laughs at both; and yet his conduct towards me alone demonstrates a degree of goodness which, perhaps, few of the votaries of either virtue or religion can equal.” (I, 125)

Colonel James は宗教や道徳の信奉者ではないが、戦場で傷ついた Booth を手厚く看護してくれたり、数度にわたって Booth 一家を経済危機から救ってくれたのである。George Sherburn も言っているように、この James 評は誤まったものなのであるが、⁶小説の始まった時点では、Booth は宗教や道徳による動機付けがなくても、情け深くやさしい人間、その人を支配している情念が全くの善である人間こそが立派なのだと確信しているのである。

しかし、逆にその人の心の中で優勢である情念が善以外の場合、それをもたらす悪徳というものも、彼の理論では容認されるはずである。つまり、人間というものは、瞬時の優勢な情念 (predominant passion)、衝動によって行動するのだから、道徳をめぐる心の葛藤など無意味だと Booth は考えているのである。彼の誘惑に負けやすい精神構造は、確固たる道徳や宗教理念でなく、人間は瞬時の衝動によって行動するという彼自身の信条に由来するのである。

Booth の情念論への信奉は、社会に対する彼の不平不満の変形物であると考えてよい。彼はジブラルタルで華々しい戦功を立てたにもかかわらず、世間から全く顧みられない。他方、全く軍事的功績のない士官達が、財力や縁故関係の力で出世していく。善行している者が虐げられ、悪者が栄えている。こういった現象を眼のあたりにして、Booth は——決して神の存在は否定はしないが——情念の虜になったのである。

IV

Booth の精神構造を論ずる際に、今ひとつ理解しておかねばならない点は、*Amelia* の中で Booth が 3 回経験している獄中生活の象徴的な意味である。*Joseph Andrews* の登場人物である Mr. Wilson も Booth と同じように、放蕩三昧の末に債務者拘置所に投獄される。Martin C. Battestin は、この Wilson の投獄と *Consolation of Philosophy* の中に見られる Boethius の投獄との類似性を次のように述べている。

The main source for the Christian defense of Providence and free will as opposed to Fortune is, of course, Boethius' *Consolation of Philosophy* Indeed, before his spiritual rescue by the Lady Philosophy, Boethius' troubled state of mind while awaiting death in prison bears a broad resemblance to Wilson's condition, hopelessly languishing in debtor's prison until the charity of his future wife gains his liberty; each must learn the folly of trusting in Fortune and the true wisdom of recognizing God's Providence, which tests and corrects the individual soul through prosperity and adversity⁷.

虚栄心の虜になって Fortune に身を委ねた Wilson にとっても、神の摂理 (Providence) の正義に疑いを抱いた Boethius にとっても、監獄とは彼らを身体的に拘束する場を意味するばかりでなく、彼らの魂の混乱状態、行き詰まりをも象徴的に意味するのである。そして、Booth の獄中生活もまた、Alan Wendt の言葉をかりるならば "a symbol of the spiritual imprisonment which had limited his actions"⁸ なのである。*Amelia* の中で、情念論を信奉する Booth は、この精神的な混乱状態に陥り、いろいろな思想と遭遇し対決するのである。Booth に関する限り、*Amelia* は 3 度の拘留を通しての、彼の内的遍歴の物語であると言えるのである。

Booth はジブラルタルから復員した後、田舎で農夫として生きようとしたが、事業の失敗と贅沢のために山のような借金をつくって、ロンドンへ逃げてくる。当時の法律では、債務不履行があった場合、債務者は即座に逮捕され拘留されたのである。債務者が逮捕を免れるための唯一の方法は、ロンドンの中の宮内大臣管区 (the verge of court) — 王宮を含む地域で宮延裁判所が裁判権を持っていた — へ逃げ込むことであった。(債務者達は日曜日だけは逮捕の心配なく宮内大臣管区の外へ出られたということも *Amelia* に記されている。)

Booth も逮捕を逃れるためにロンドンへ来たのではあったが、不運にも彼は道端で2人組の暴漢に襲われている人を助けた時に、制止しに来た夜警を打ちのめし、そのランタンを壊したかどで逮捕されてしまう。彼は告発され、悪名高い Justice Thrasher によって監獄へ送られる。そこで Booth は、Robinson の運命論、Cooper のメソジズム、さらに Miss Matthews が帰依している Mandeville の思想に直面するのである。先ず、運命論者 Robinson は、次のような彼独特の哲学で、打ち沈んでいる Booth を慰めようとする。

... what is, is; and what must be, must be. The knowledge of this, which, simple as it appears, is in truth the height of all philosophy, renders a wise man superior to every evil which can befall him. I hope, sir, no very dreadful accident is the cause of your coming hither; but whatever it was, you may be assured it could not be otherwise: for all things happen by an inevitable fatality; and a man can no more resist the impulse of fate, than a wheel-barrow can the force of its driver.

(I, 13-14)

Robinson の意見は、人生を必然論的に見るという点では Booth の考え方と一致する。しかし、Robinson が、人間は運命のもつ盲目的衝動の支配下に

あると主張するのに対して、Booth は、人間はある瞬間に心の中で優勢である情念によって行動するのだとやり返す。また Booth は、神の存在まで否定したりはしない。Booth に信じられないのは、この世の隅々まで神の摂理が及んでいるということなのである。Booth の微妙な心理を Fielding は、Claudian の詩を引用して説明している。

... labefacta cadebat

Religio, causaeque viam non sponte sequebar

Alterius; vacuo quae currere semina motu

Affirmat; magnumque novas per inane figuras

Fortuna non arte regi; quae numina sensu

Ambiguo, vel nulla putat, vel nescia nostri. (I, 14)⁹

Booth の信仰心は揺らいでいた。何ら悪行を行っていないのに、大きな不幸が彼を襲ってくる。戦場でいくら活躍しても認めてもらえない。ロンドンで人助けをしたら、逆に投獄の憂き目に会う。もし神の摂理なるものが、この世にあるなら、自分がこんな不当な扱いを受けるはずがないのにと、Booth は実感している。このような Booth の神の摂理に対する不信は、Robinson の運命論程度では解消されない。

次にメソジストの Cooper が Booth と議論しにやって来る。彼は、“As for crimes, they are human errors, and signify but little; nay, perhaps, the worse a man is by nature, the more room there is for grace” (I, 20) と自らの宗教的見解を述べる。メソジスト達は、“salvation is the free gift of God” であり “it is not to be earned by mere moral performance”¹⁰ と考えているのである。この主旨は、Cooper 自身の行動にも反映されていて、彼は Booth との会話が終了するや、早速彼のたばこ入れを盗み取ったのである。Booth のメソジズムに対する反応は、*Amelia* では詳述されていないが、Booth が Cooper 流のメソジズムに魅せられなかったことは言うまでもな

い。

Miss Matthews は、Mandeville の愛読者である。(Fielding は Mandeville と綴っている。Mandeville を Man + devil と解していたのかもしれない。) Mandeville の思想というのは、人間の本性は悪であり、個人の悪徳が全体の美德をもたらすことになるという一種の性悪説であった。Mr. Hebbers に裏切られて失意に陥っている Miss Matthews が Mandeville の思想に魅せられたのも無理はない。しかし、Booth は Mandeville の思想に次のように反発している。

[Mandeville] hath repersented human nature in a picture of the highest deformity. He hath left out of his system the best passion which the mind can possess, and attempts to derive the efforts or energies of that passion, from base impulse of pride or fear. Whereas, it is as certain that love exists in the mind of man, as that its opposite hatred doth, and the same reasons will equally prove the existence of the one as the existence of the other. (I, 125-126)

Booth の情念論では、人間は心の中で一番優勢な情念に従って行動する故に、人間自体には善悪はないということになる。しかるに、Mandeville は人間の卑しい衝動ばかりに注目している。人間の良い面を全く見ようとしない Mandeville の思想に、Booth は不満を感じているのである。Mandeville の思想もまた Booth の神の摂理に対する疑惑を晴らしてくれなかったのである。

Booth は、彼の事業拡大や奢侈を快く思っていない近隣の農夫達の悪意(彼らは Dr. Harrison に Booth のことを讒言した)によって、2度目の監獄生活を味わう羽目になる。Booth は執行吏の奸計にはまって逮捕され、Mr. Bondum の債務者拘留所(借務未済のために逮捕された人が債務者監獄へ送られる前に借金を払う機会を与えられるために一時的に収容された所)

に収容される。Booth の情念論は、そこでストア派の思想に直面する。収容者の中に、ストア派の哲人がいて、人生は非常に短く又非常に不確定なものだから、嬉しい時に大得意になったり、みじめな時に悲嘆に暮れたりするのは馬鹿げたことだと、Booth に説教する。哲人はさらに続けて、無関心の効用について言及している。

Hence it is, that I have learned to look on all those things, which are esteemed the blessing of life, and those which are dreaded as its evils, with such a degree of indifference, that as I should not be elated with possessing the former, so neither am I greatly dejected and depressed by suffering the latter. (II, 216)

Booth は、ストア派の理論の完璧さを賞賛しながらも、その完璧な理論が実行にたえるものとは信じがたいと告白する：“however true all this may be in theory, I still doubt its efficacy in practice. And the cause of the difference between these two is this: that we reason from our heads, but act from our hearts . . .” (II, 217). 人間とは、賢明であれ愚かであれ、情念によって行動するのだから、理屈など無用なのである。ストア派に対する Booth の疑惑は、哲人が執行吏に Newgate 行きを通告されると、非常に狼狽するという事実によって裏打ちされることになる。

Mr. Trent の策略によって、Booth は3度目の拘留生活を体験する。そのとき、Booth は Dr. Barrow の説教集を熟読し大いに感銘して、そこに自分のキリスト教を見出し、クリスチャンとして開眼するのである。Booth は、彼の庇護者である Dr. Harrison に初めて、自分の信奉してきた情念論について告白する。

Indeed, I never was a rash disbeliever; my chief doubt was founded on this—that, as men appeared to me to act entirely from their passions,

their actions could have neither merit nor demerit. (Ⅲ, 211)

Dr. Harrison は、Booth が懐疑心を取り除いたことを祝福し、Booth の信仰が彼の将来の生活にも好影響を及ぼすものと期待する。彼は Booth の情念論をこう評している。

... if men act, as I believe they do, from their passions, it would be fair to conclude that religion to be true, which applies immediately to the strongest of these passions, hope and fear, chusing [sic] rather to rely on its rewards and punishments, than on that native beauty of virtue which some of the ancient philosophers thought proper to recommend to their disciples. (Ⅲ, 211-212)

Ernest A. Baker にも言っているように、Dr. Harrison は *Tom Jones* に於ける Allworthy 同様、Fielding の宗教観の代弁者である¹¹。宗教は最高のものであるから、人間の行動は、心の中の優勢な情念ではなく、神に対する望みや恐れに動機付けられねばならないと、Dr. Harrison は Booth に諭すのである。このようにして、Booth の思想遍歴は彼のキリスト教徒としての開眼という形で終了する。しかし、Booth の開眼は、あまりにも唐突であるため、読者は驚きを禁じえない。人間の行動を神に対する望みや恐れに動機付けられるようにするにはどうすべきなのか、Booth の開眼が何を意味するのか、つまり Booth はその思想遍歴を通してどのような教訓を得たのかが、読者にははっきりと明示されていないのである。Booth 自身を尚一層詳しく知るには、彼のキリスト教徒としての開眼の問題に迫ってみる必要がある。

V

Amelia の読者は、Booth に全く職業意識がないことに気付くにちがいな

い。確かに彼は哀れな半給の下級士官ではあるが、彼には家族を養うために何らかの職を得るといった意欲が全く見られない。Sheridan Baker の指摘通り、彼は事態が好転するのをただ待って待つばかりなのである。¹² Booth は当時の紳士階級に属する人物として描かれてはいるが、一口に紳士階級と言ってもいろいろある。大土地所有者、債券所有者、何らかの年金受領者などのように、職がなくても裕福な暮らしのできる紳士もいれば、何らかの職に就かないと生計を立てることもおぼつかないが、かといって肉体労働者になり下がることもできず、権力のある人に縋って職を恵んでもらうしかない紳士もいたのである。Booth は紳士とは言え、後者の紳士に近い立場なのである。現代の読者ならば、Booth には働く意志がないのだと速断しかねない。従って、*Amelia* の読者は紳士階級にへばり着いている Booth の境遇を理解できる人でなければならない。

Amelia の読者に関しては、George Sherburn も意見を述べている。*Amelia* では、他のどの作品よりも引用文が多く、またその出典が非常に多岐に及んでいるにもかかわらず、ギリシャ語やラテン語からの引用文に全く訳注が付けられていない。例えば、Claudian の詩のように、登場人物の動機付けに不可欠な一節ですら訳がついてないのである。以上のことから、George Sherburn は、Fielding が *Amelia* の読者を古典の読める人に限定していたのだと主張している。¹³ Booth の職業意識の問題、*Amelia* に於ける引用文の問題から判断して、*Amelia* 自体がハイクラスな読者向けに執筆されたのではないかと予想される。

Fielding は、*Amelia* の中に運命論、メソジズム、ストア派の思想などを持ち込んではいるが、いずれの思想についても詳述は避けられている。レベルの高い読者ならば、それぞれの思想の名前を知るだけで、その骨子も理解しているはずと判断していたのかもしれない。このことは、Dr. Barrow の説教集に関しても言えることで、18世紀の知識人と同じ知的背景を持たない読者は、Dr. Barrow の説教集を読んで、*Amelia* 解釈の一助としなければ、

Booth の開眼を細かく分析することができなくなる。

Isaac Barrow は、17世紀の著名な数学者・神学者であった。同じ Isaac という名を持つ Newton の師であると同時に、John Tillotson や Samuel Clark らと同じ広教会派 (Latitudinarian) の一員であった。広教会派の神学者達は、人間の本性は本質的に高潔なものであるが、悪しき教育、悪しき習慣のせいで堕落するのだと説いている。従って、彼らにとって救いとは、道徳を実践することのみによって勝ち得られるものなのである。人間の魂が完全なものと言わぬまでも、完全たりうるものなのだということを力説し、道徳の実践による社会改革を志向したのが、広教会派の人達であった。¹⁴

Dr. Barrow は、英語やラテン語で書かれた膨大な数の説教を後世に遺した。Fielding が彼の説教集を所蔵していたことも今では明らかになっている¹⁵。Fielding は、*Amelia* の中で Booth を Dr. Barrow の説教集を読んだ人物として創り上げている。それでは、3度目の拘留生活で Booth が学んだものは、一体何であったのか。

Amelia の前置きの一節は、Booth の得た教訓を考察する上で、読者に有力な手掛りを提供してくれている。

To speak a bold truth, I am, after much mature deliberation, inclined to suspect, that the public voice hath, in all ages, done much injustice to Fortune, and has convinced her of many facts in which she had not the least concern. I question much, whether we may not, by natural means, account for the success of knaves, the calamities of fools, with all the miseries in which men of sense sometimes involve themselves by quitting the directions of prudence, and following the blind guidance of a predominant passion (I, 1)

人間の不幸というものは、すべて盲目的な衝動によって行動した本人の不始末であって、運命や偶然は全く関知していないのだ、それ故、運命の苛酷さ

に悲憤慷慨しても無駄なのだと、Fielding は読者に宣言しているのである。Dr. Barrow も運命に立腹することの空しさを述べ、神の摂理の存在を読者に知らせている。

We are apt, when any thing falleth out unpleasant to us, to exclaim against fortune, and to accuse our stars; or to inveigh against the second causes which immediately offend us, ascribing all to their influence, which proceeding doth argue in us a heathenish ignorance and infidelity, or at least much inconsiderateness and impotency of mind; that our judgment is blinded and clouded, or perverted and seduced by ill passions; for that in truth there is not in the world any occurrence merely fortuitous or fatal (all being guided and wielded by the powerful hand of the all-wise and almighty God,) there is no creature which in its agency doth not depended upon God, as the instrument of his will, or subordinate thereto; wherefore upon every event we should, raising our minds above all other causes, discern and acknowledge God's hand¹⁶

Booth の不満の因は、彼がジブラルタルで戦功を立てたにもかかわらず、陸軍省に認めてもらえなかったことや、人助けをしたのに留置所へ収容されたことにある。そして、これらの不満の種が、彼の宗教観を懐疑的にし、彼の中にあの情念論を根づかせたのである。しかし、Dr. Barrow の説教によって、Booth は運命ではなく神こそがこの世を支配しているのだということと、自らの苦境を招いたのは他ならぬ自分の愚行だったと悟るに至る。

次いで Booth は、悪しき情念を如何にして排除すべきかを学ばねばならない。Booth がキリスト教徒としての開眼を経験した時、Dr. Harrison は、すべての情念の中で最も強固な“hope and fear”に即座に訴えかけてくる宗教こそが真実だと結論付けているが、人間が如何にして悪しき情念を捨て、

“hope and fear” に頼るのかについては、何も言ってくれていない。この問題も、Dr. Barrow の説教にまで遡って考えると、容易に解決される。Dr. Barrow は、次のように理性の適切な用い方について言及している。

... if we reflect upon ourselves as rational men, how for shame can we be discontent? Do we not therein much disparage that excellent perfection of our nature? Is it not the proper work of reason to prevent things hurtful or offensive to us, when that may be done; to remove them, if they are removable; if neither of these can be compassed, to allay and mitigate them, so that we may be able well to support them? Is not its principal use to drive away those fond conceits, and to quell those troublesome passions, which create or foment disquiet and displeasure to us? If it cannot do this, what doth it signify? to what purpose have we it?¹⁷.

人間は、どんなに悪世に不満を抱いていても、神の摂理を信じ、理性に訴えかけて悪しき情念を抑えて生きてゆかねばならない。確かに Booth の愚行は、彼の思想のせいであった（運命や偶然が支配するこの世では、道徳心を奮い起こしても仕方がないと彼は考えていた）。しかし、この世に君臨しているのが神であることを自覚した以上、彼は道徳をめぐる心の葛藤を続けていかねばならない。これこそが、Booth のキリスト教徒としての開眼の意味なのである。

Booth の開眼した後、Dr. Harrison は、“...as the devil hath thought proper to set you [Booth] free, I will try if I can prevail on the bailiff to do the same” (Ⅲ, 212), と言っている。Booth はその開眼によって精神的な行き詰まり状態 (spiritual imprisonment) から解放されたばかりでなく、身体的拘束 (physical imprisonment) からも解放される。同じ債務者拘留所に収容されていた Robinson が、臨終の床で悪徳弁護士 Murphy 一味によ

る Amelia の遺産横領を告白する。そのおかげで、Booth 夫妻は莫大な財産が転がり込み、Booth は山のような借金から解放されたのである。今や彼は、日曜日以外でも大手を振って宮内大臣管区の外を歩ける人間になったのである。このようにして、Booth は精神的にも身体的にも自由の身となるのである。

VI

従来 の 批評 に も Booth を 弁 護 す る 動 き は あ っ た 。 Murial Brittain Williams は、他の登場人物達——親友の妻をつけ狙う Colonel James、人妻を墮落させるのを趣味にしている匿名の貴族、出世の為に自分の妻を売った Mr. Trent——に比べると、Booth の不道徳など微々たるものだ と 主張 して いる。¹⁸ また、George Sherburn は、Booth の過ちは18世紀の英国紳士共通の過ちだと大々的に弁護している。¹⁹ 私は先に、Booth の人格に見られる美德と悪徳の混在という一見矛盾するように思われる現象を、Booth の思想的背景を通して分析すると述べたが、ここに至って Booth にまつわる美德と悪徳の構図が明らかになってくる。Booth は本来善良な人間なのであるが、当時の社会への不合理さや不公平さに対する不満が彼を情念論へと駆り立て、彼を悪徳にかかりやすい体質にしたと考えるのが、妥当であるように思われる。

Sir Walter Scott は、Amelia を Tom Jones の続篇とみなして、“we have not the same sympathy for the ungrateful and dissolute conduct of Booth, which we yield to the youthful follies of Jones” と言っている。²⁰ 確かに Jones の愚行は若気の至りや人生経験の不足によって引き起こされたもので、Jones より年長で一家の主たる Booth が同じ過ちを犯せば、もはや許されないであろう。しかし、読者は Booth の愚行と Jones の愚行との本質的な相違を見極める必要がある。Murial Brittain Williams は、その違いを下記のように分析している。

Tom never wrestles with religious doubt; he declares himself, though a sinner, at bottom a Christian. Booth is a skeptic; unlike Tom, he is without the moral courage to accept his misfortunes as a result of his failings. He must be brought to the realization of individual moral responsibility²¹.

Boothは老けた Jones でもなければ、脆弱な Jones でもない。彼は神の摂理に対する懐疑と戦わねばならなかった同時代のキリスト教徒の英雄なのである。Ameliaを読んだ時、Boothのキリスト教徒としての開眼や成長に、読者が納得できないのは、Fieldingが現代の小説家のような巧みな心理描写のテクニックを用いていないからである。

Ameliaは、一組の夫妻を描いた小説である。そして、一見した所では妻のAmeliaの有徳のみにスポット・ライトが当てられ、夫のBoothは妻の引き立て役にすぎないように思われる。しかし、この小説の中で行動をしているのは、むしろBoothの方であり、彼が幾多の思想と遭遇しながら自らのキリストを見出していく過程を見れば、彼に単なるAmeliaの引き立役以上の価値—懐疑心と戦いながらキリスト教徒として思想的道徳的に開眼した、同時代のキリスト教徒の英雄としての価値—があることは否めないであろう。

注

1 Ameliaのタイトルページは、“Felices ter & amplius / Quos irrupta tenet Copula.”と“Γυναικὸς οὐδὲν χωρὶ ληΐζεται / Ἐσθλῆς ἀμεινον οὐδὲ ῥίγιον κακῆς.”という2つのエピグラフが付されている。Allan Wendtは、“The Naked Virtue of Amelia,” in *ELH*, 27(1960),131. でこのエピグラフについて、次のように言及している

And both epigraphs which Fielding chose for his title page direct at least learned reader's attention to the author's interest in the heroine. The quotation from Horace, which may be translated, 'Thrice happy and more are those held in unbreakable union,' serves to emphasize Amelia's part in the marriage rela-

- relationship which is the subject of the novel; the passage from Simonides, which may be translated, 'A man can possess nothing better than a good woman, nothing worse than a bad one,' clearly continues the focus on Amelia.
- 2 Ernest A. Baker は、その著書 *Intellectual Realism: from Richardson to Sterne*, Vol. IV of *The History of English Novel* で下記のように述べている。

The frail and susceptible husband is necessary, not merely as a foil to Amelia's virtues; but as the involuntary agent of her trials; but he is entirely of secondary importance. ([London: H. F. & G. Witherby 1937], p.159.)

また、F. Homes Dudden も *Henry Fielding: His Life, Works, and Times* で次のように述べている。

The incidents are important only for their direct or indirect bearing on Amelia's fortunes; the other characters revolve round her, and from their relation with her derive their values. Booth himself is only of consequence as Amelia's husband. ([Oxford: The Clarendon Press, 1952], II, 819)

- 3 Aurélien Digeon, *The Novels of Fielding* (London: Routledge, 1925), p.206.
- 4 George Sherburn は "Certainly, the novel glorifies the perfect wife; and Amelia, firm as a rock, is the static character against which the storms of adversity beat." と評している。"Fielding's Social Outlook," in *Eighteenth-Century English Literature: Modern Essays in Criticism*, ed. James L. Clifford (New York: Oxford University Press, 1977, p.263)
- 5 Henry Fielding, *Amelia* ("The Shakespeare Head Edition"; Oxford: Basil Blackwell, the Shakespeare Head Press, 1926), I, 15. 以下この版からの引用はその直後の括弧内に巻数とページ数のみを記す。
- 6 George Sherburn は "Fielding's Social Outlook" で Booth の誤った判断について、次のように述べている。

Booth quite plausibly mistakes casual, selfish kindness for true good will, realistic understanding of James and his type of selfish kindness was one of the hardest lessons Booth had to learn. (p.264)

- 7 Martin C. Battestin, *The Moral Basis of Fielding's Art: A Study of Joseph Andrews* (Middletown, Connecticut: Wesleyan University Press, 1959), p.49.
- 8 Allan Wendt, "The Naked Virtue of Amelia," *ELH*, 27(1960), 146.

9 George Sherburn は、彼の論文 “Fielding’s *Amelia*: An Interpretation,” in *Fielding: A Collection of Critical Essays*, pp.150–151 の中で、この一節が Claudian の *In Rufinum* から引用されていることを示している。Maurice Platnauer は、次のように英訳している。

... then in turn my belief in God was weakened and failed, and even against mine own will I embraced the tenets of that other philosophy [Epicureanism] which teaches that atoms drift in purposeless motion and that new forms throughout the vast void are shaped by chance and not design—that philosophy which believes in God in an ambiguous sense, or holds that there be no gods, or that they are careless of our doings. (Claudian, *In Rufinum*, Vol. I of *Claudian*, the Loeb Classical Library, trans. Maurice Platnauer [Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, and London: William Heinemann, 1976], p.27)

- 10 Martin C. Battestin, p.23.
- 11 Ernest A. Baker, p.175.
- 12 Sheridan Baker, “Fielding’s *Amelia* and the Materials of Romance,” in *PQ*, 41 (1962), 448.
- 13 George Sherburn, “Fielding’s *Amelia*: An Interpretation,” p.147.
- 14 Martin C. Battestin, “The Christian Background,” in *The Moral Basis*, pp.14–25.
- 15 Ethel Margaret Thornbury, *Henry Fielding’s Theory of the Comic Prose Epic* (Madison: University of Wisconsin Press, 1931) の付録にプリントされている Fielding の蔵書リストの項目番号452に、Barrow’s *Works*, 2 vol. と記載されている。
- 16 Isaac Barrow, Sermon XXXVII, “Of Contentment,” in *The Works of Isaac Barrow, D. D.* (New York: C. Riker, 1845), I, 416.
- 17 Isaac Barrow, Sermon XXXVIII, “Of Contentment,” *Works*, I, 430.
- 18 Murial Brittain Williams, *Marriage: Fielding’s Mirror of Morality* (University, Alabama: The University of Alabama Press, 1973), p.110.
- 19 George Sherburn, “Fielding’s *Amelia*: An Interpretation,” p.149.
- 20 Sir Walter Scott, *Biographical Memoirs of Eminent Novelists, and Other Distinguished Persons*, in *The Prose Works of Sir Walter Scott, Bart.* (Edinburgh: Robert Cadell, 1834), III, 111.
- 21 Murial Brittain Williams, p.109.